
らき☆すた 変わる日常 不協和音

さるめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らき☆すた 変わる日常 不協和音

【Nコード】

N0398M

【作者名】

さるめ

【あらすじ】

注意書きかもしれませんが…

簡潔に言うならガイアード様の『変わる日常』の三次創作です。

そしてその展開は、恐らく暗く陰鬱になるやもしれません。

そして、変わる日常の中にいる原作キャラ達がかなり不遇になるかもしれません。

割と過激な表現があるかもしれません。

タクトは振られた。(前書き)

初めまして、さるめと申します。

タイトルの事ですが、ガイド様の書くらき☆すたの二次創作の三次創作としてこの話は進んでいます。

ガイド様から許可は頂いており、このような運びになりました。ですので、この小説の設定は最低でもガイド様の『変わる日常』そして、Arcadiaで書いている『迷い込んだ黒犬』ここにあるその外伝を

読まないと訳が分からないと思いますので、そちらの方から読んでくださると幸いです。

迷い込んだ黒犬シリーズ

本編

<http://mainet.at.h.cx/bbs/sst/sst.php?act=dup&cate=tc&all=12294&n=0&count=1>

外伝

<http://ncode.syosetu.com/n0847j/>

変わる日常 ガイド様執筆

<http://ncode.syosetu.com/n4101h/>

突発的な企画で見切り発車な感がありますが、お付き合いお願いし

ます。

タクトは振られた。

まっすぐ生きよう……。

そして…この苛烈な憎悪やジメついた汚い感情に、対象となる洗面器に思い切って吐き捨てよう。

汚物よりも汚い感情をそれにぶつけて、その黒い水に映る自分の姿を嘲笑おう…そして、そのゲロのような感情にまみれた洗面器もだ。

学生服を着こんだ華奢な青年が、どこか気だるげにキツネっぽいタレ目を細めた後、ダルそうに欠伸をこぼした。

「僕が、今更……高校生とはね…それに谷相さんも先生…か…」

埼玉の通学路を歩きながら、欠伸をこぼした後、どこか冷めた目で天を仰いだ。

彼の名前はさかき榊 しんや真夜

今日、陵桜高校に入学する少年だ。その少年を説明するには風変わりと言う方が正しいだろう。別に不良のように学生服を改造しているわけではないが、その少年は特徴のある顔をしていた。

何と云うか、美少年や端正で精悍な顔では絶対ないのだが、癖のある印象に残る顔つきだった。顔が崩れてるとかブ男かというわけでもなく、パーツが不思議なのだ。

まず、細めでタレ目……シャープな顎。

そして眼もとにはそばかすがあるのだが、眼の隅には鋭く深い隈があった。

髪型は何と言っているのか、本来は恐らく長髪なのだろうが頭の後ろにポニーテールをまとめるようなゴムがみえた。

それだけならまだしも、それを後頭部にサークル上にヘアピンなどで後頭部に接着して、女性がするようなヘアースタイルだからだ。

本来なら、その髪型は中性的な美丈夫が似合う髪形のはずなのだが、こういうワケかこの癖のある端正？な顔つきの彼にはそれが似合っていた。

（時間もあるし、ゆっくりいこう…1年しかないけど、焦ったら負けだしね…）

真夜はそんな事を考えながらボーっと歩いていると、やや喧騒が聞こえてきた。

路地裏のコンクリートの石垣でなにやら男女の言い争いが聞こえている。

癖のある顔の少年は目細めてその方向へとふらりと向かった。

「まあ、遅刻の言い訳は出来るよね？転校生だから…そして腕試しにはちようどいいか」

冷たい笑みを虚空に向けて言い争いの種となる場所へと向かった。

「どいてくれない？あなたに構ってる暇はないのだけれど？」

「はぁ？なにユってんだてめえ？俺からパクっというて、盗人が…」

少し釣り目の勝気な顔をして髪の毛はロングの髪の子高生が、汚いものを見るような眼でいかにも腕っ節だけが取り柄そうな典型的な不良を見つめてそう云った。

その少女の手には傷だらけの黒い仔犬が大事そうに抱えられている。

「動物虐待が？私はこの子の手当てをしなくてはいけないの？どいてくださる？」

「っ、このアマっ！！強姦すぞ！？」

怖くはなかった、それでも私は足に自信が在る方だ。

こんな下品な男に負けてたまるか的な？信念に火がついたからだ。

だが、予想外の事が起こった。最悪な方ではない、意外な事だ。

「あーはいはい……ここから、変質者の声が聞こえましたよー…みなさーん」

テンション低くわざと棒読みかつローなテンションで真夜は『それ』を発見すると、ニカッと笑みを浮かべた。

少女もその不良も拍子抜けしたものの、少年を見やる。

「ああ？スカしてんな？ガキが？」

「いやいや…あなたほどじゃないですよ、おっさん…わー、こっちきて初めて見たー…今でもいるんですねー…こんな時代錯誤なチン

ピラオヤジ♪」

優しい笑顔のまま、さらりと毒を吐きその少年は笑った、その不良は逆立てた髪型のごとく、怒髪天をついたようで怒り狂うように彼に向かっていった。

「俺はあまだ、18ダァっ!!」

厳めしい顔を引きつらせて、遅くない動きで走り襲いかかっていく。その不良はガタイも大きく、筋骨も太く殴られれば華奢な青年など一卷の終わりのように思えた。

事実、目の前の少女ですらそう思っただろう。だが、予想は大きく裏切られる。

肩口からアメフトの様にタックルを不良はしかけたが、すでに真夜は消えていた。

いや、消えていたのではない。ただ単にしゃがんだだけだ。

「っ!!!!」

「……これじゃ、腕試しにならないね…あいつに通用するか…どうか…」

ぶつくさそう云いながらも真夜はブリッジをするように上体を折り曲げて、サマーソルトのように不良の顎先を貫き蹴り刺した。

ごっ……

脳震盪が怒り、鈍い激痛が顎先に突き刺さり男の意識を数秒飲み込んだ。

「っ——あっ：！？ちい：どこだ」

急に突き刺さり激痛を無理やりこらえ、自分の顎に蹴りを放った人を食ったような少年を探したが……

「実は、移動してませ〜んつままたまた：僕のターン……んー……ア
ンタボロすぎ……」

にっこりとほほ笑み、そのままサマーソルトを連続で何度も彼の顎を蹴りあげ、ガタイのいい彼の巨体をわずかに浮かせてた。

「す……すごい……」

孤月を描く蹴りの連続の華麗さに少女は見惚れたようにそう言葉を洩らしていた。

数回、連続で不良の顎をけり碎いた真夜は最後の蹴りで空中でクルリと身をひるがえして忍者のように着地した。

「喧嘩の弱い不良……ってねえ……ええつと……む……ああー……君からケンカや暴力を取ったら……って考えてみたけど……生まれてくるだけ無駄だったね」

優しい笑顔で辛辣な毒を吐き、真夜はメンド臭そうにため息を吐いた。少女はその容赦のない物言いに僅かに冷汗を垂らした。

少しだけ倒された不良の事を同情したが、それも数秒で彼に向かい躊躇うように尋ねた。

「あのっ……」

「ん？」

「あ…っ、ありがとう…助かったわ…」

「んー…しかし、こう云うベタな展開って在るんだ…小説や漫画の中だと思ってた」

礼を言った少女に真夜は意外そうに呟いたが、少女は僅かに首を傾げた。真夜はそれに気づいて苦笑を浮かべた。

「あー、こう云うチンピラや…それに絡まれる美人のヒロインやそれを助ける主人公って構図…まさか、自分が主人公とかいうそんな構図になるとは思わなかったけど」

「何っそれ」

そう云う真夜に少女は嘖き出しながらも、美人のヒロインという単語に気を良くしたのか仔犬を両手に抱えたままニコニコとしていた。

「……?で、キミ……大丈夫?」

「えっ、はっ、はい…平気っ……でも…この仔が…」

真夜にそう振られて少女は焦ったように黒い仔犬を差し出した。傷だらけで弱い。よく見れば黒に溶けて分からないが赤い血がにじんでいた。

寝ている不良にやられたのか、それとも別の要因かどうか分からないが…あまり芳しくないようだ。

「…ね。キミ? 陵桜生?」

「えっ…そ、そうだけど…」

「実は僕、陵桜の転校生なんだよね…で、今、道に迷っている…っ
て思っていて? そう云う設定…分かる?」

「え? ええ…」

癖のある顔を笑顔にしながら彼女にそう云うが、当然何が何やら分からない。

「だから、例え今日初日で遅刻しても……そう大して問題ない……OK?」

流石にそこまで聞くと分かったのか少女はくすりと微笑んだ。それを受けて少年もそばかすと隈のある顔で無邪気な笑みを浮かべた。

「僕は道に迷って仔犬を拾い、動物病院へと行った……君はそのウマを伝えて陵桜に行って欲しいんだ……出来る?」

「ふふっ……案外、あなた回りくどいのね……分かったわ、でも動物病院なんて知ってるの?」

「あ……ちよっと知り合いにそれに精通してる人がいるから、まあ、すぐ近くなんだよね……というわけでタノムヨ」

「ええ、任せてっ……伝えておくわ」

「あ……ところでさ、キミって何年?」

「今年で3年生よ、つい最近なったばかりの」

「あ……僕もそうなんだよ……ひょっとしたら、ベタに同じクラスになるかもね?」

そう云うと真夜は面白そうに笑みを浮かべる、その笑みがどういうワケか少女には引きつけられるような何かが在った。

決して、美男子でも美系でも端正ですらない顔……だが、癖のある崩れていないタレ目の隈とそばかす付きの顔がどういうワケが見ようによってはどんな美丈夫よりも整っているように見えて……。

「あなたっていい顔してるわね?」

「え?」

「何ていうか、善人にも悪人にも見えて、カッコいいけど、それだけじゃなくて何処か怖くも見える顔してるわ……んー…何かキモカッコイイ？っていうのかな？」

「それ、ほめてないよね？」

「ふふ…悪いわね。ちよつとだけ私も口が悪いの…じゃ、事情は伝おえるわ…また、学校で会いましょう…つとその前に私の名前は織部お由美子…あなたは？」

「榊 真夜…じゃ、頼むよ」

「いや、本来私が頼む立場なんだけど…まあ、いいか…よろしくね？犬の事もそうだけど、クラスが一緒なら、最後の一年はよろしくね」

「アハハっ…覚えておくよ」

そういうと由美子はやや速足で歩き去っていくと、それを見やった後、彼は背を向けて仔犬をその場におろした。じっと彼はその仔犬を見やった。

そしてゆっくりその仔犬の首筋に手を伸ばして…………。

ごきん!!!!

「きやう…ん」

骨を砕く生々しい音が響き、黒い仔犬は物言わぬ肉塊になった。

「よく頑張ったね…お前…：せめて…：楽に逝け…：おやすみ…」
真夜には分かっていた。もうその仔犬は冷たくなりかけている事も、恐ろしい位重さがない事も…。生きる事が想像を絶するほど苦しい事も…。

ならば…やる事は一つだった。

「へっ…へ…テメっ、殺したのか？」

意識を取り戻した不良の声が真夜の耳に不愉快に響いた。真夜はその言葉をきくと……

「ぎゃ…」

「ガ…：ハっ…！！」

サッカーボールをける様に倒れている彼の歯を蹴り碎いた。

血と白い破片が飛び散り男の後頭部をコンクリの石垣に叩きつける。

「んー…何か蹴ったかな？」

「はっ…ゴボっ…！！」

気が狂うほどの激痛、歯茎に針を刺され引っかかり回されるような想像を絶するような痛みが走り、泣きじゃくり嗚咽を洩らしながら呻きのたうつ。

「は…：はんわ…」

歯が先程の蹴りで砕かれたため、旨くしゃべれないが彼は恐怖を浮

かべながら泣きじゃくる様に彼を見上げたが、真夜は興味がないように見つめ返した。

その表情には光は一切ない。

「なあーに？わかんない…次はどうしようかな…口に水銀入れようかな…ああ、それとも爪をベンチで全部一気に剥ぐ？歯もまだ残ってるから可能かな？」

何処か楽しそうに真夜はそう云った。そう云うと、物言えぬ不良の頬をけり上げる。

不良は絶望と恐怖におののいた。

この男は自分の命など、何とも思っていない。いや、壊れている。

「ひゅ…ひゅるふいへ……」

恐らく、許してと言ってるのだろう。真夜はそれを聞いて微笑む。

「いーよ？」

死ねば許してやる……。

その言葉に男は眼を見開きよろよろと、逃げだし立ち上がると全速力で逃げ出した。

「あー…あんまり走らない方がいいよ…その曲がり道…」
不良は恥も体裁も投げ捨てて、交番や警察にでも駆け込むつもりだったのだろう。だが、それは叶わなかった。

「そこ、車通りが多い交差点だから…」

ごん！！ごっしゃあああ！！！！！

『ひっ、人が飛んで来たぞっ…』

『きゃあああああっ！！！！』

『うっわ…』

普段の男なら事故る事はなかっただろう。

だが、目の前の壊れた少年を前に状況を確認する余裕もなく、呆気なくくらいにその短い生涯を終えた。

「キミってさー……あの犬より、軽い命だねー…まつ、逆に安すぎてレアかもね……でも、引いた人には悪いことしちゃったな」

その喧騒も見ずに真夜は興味もないのか、一瞥もせずもう動かない犬を拾って歩いていく。

———墓、作らないと…公園に行こう。

「ごめんね……織部さん……」

その仔犬を抱えてうつむくタレ目が前髪を隠していたが、滴が落ちてその仔犬の亡骸を濡らした。

———僕も多分、すぐそこに行くかもしれないから……待っててよ

…その時まで

ああ、早く、森村…オマエの全てを砕いて…楽になりたいよ…。

「この一年…この時に全部かける…あいつを…あいつ等を裁く…」

天を見上げ空を睨むタレ目は鋭い半円の刃のようにだった。

それは憎しみという鉄を糧に磨かれていた。

調律を乱すタクトが今振られる…。

タクトは振られた。(後書き)

書いてしまいました。

最初投稿を失敗してしまいました。

ちなみにこの女子はガイアード様のオリジナルキャラです。

カウントダウン

遡る事

数ヶ月前の冬

陵桜学園 職員室。

シングルスーツを羽織ったオールバックの20後半ばの男が黒板の前に立ち何やら述べている。

「今日から、ここに赴任してきた谷相七瀬やさうななせと申します。至らぬところが在るやもしれませんが、よろしくお願いします」

七瀬と呼ばれる男はそう融和なそれでいて、形式的な笑みを浮かべると深々と礼儀正しく腰を折り曲げた。

そしてその横に控えていた校長が、自分たちの前にたつ教員たちに在り来たりで無難な言葉を述べた後、解散を命じた。

空いてる教師用の事務用席につくと、となりに白衣を着た気だるげで小柄な童顔な少女のような教師がいた。

「失礼します……桜庭ひかる先生でしたよね？」

「？ああ、そうですが……？これは驚きましたな……もう名前を覚えて頂いたんですか？」

「昨日の間にアルバムと名簿を受け取りましたので、円滑な人間関係を築くには相手の名前を覚えるのが基本のようなものですからね

え」

どこか癖のある発音でしみじみと七瀬は窓際を見て、しみじみと呟いた。

「何か年よりみたいですな？未だお若いでしょうに…」

「いいえ…：良くそう云われますが、もう50越えています」

『んなっ！！！？』

その言葉に隣のひかるはもちろん、聴こえていた教師全員がそれはもう驚いた。

「他の方はまだいいのですが、桜庭先生…あなたも似たようなものでしょう？後、天原先生も」

「いつ、いえ…：しかし…：（わけえ…：ここまで来ると反則的な若さだろ…」

「ひか…：桜庭先生、心の声が漏れていますよ」

純粹に感嘆する彼女を天原ふゆきは窘めるようにそう云う。
しかし彼女もやはり興味深げなのか、まじまじと見つめる。

「さて、そろそろ行きますか」

立てかけてある在りがちな丸時計をみると、七瀬はよっころと立ち上がった。そして思い返していた彼の事を。

（後は春に彼が転校するだけですか…：私の担任のクラスなら猶の事都合がいいのですが、そこはまあ、神…：邪神のみぞしる…：でしょう）

少し目線を上にあげて数秒だけ止まった。

（しかし、龍神…いえ、森村…慶一ですか…今、ご学友に囲まれて青春を謳歌してるやもしれません…ね）

———実際に、忌々しい…

眼を僅かに細めて、担当する教室へと向かった。

（とりあえず、龍神慶一……今のあなたの生活を見せてもらいましょうか？）

現在。

今、七瀬は職員室に駆け込んできた女生徒を目の端で見つめた。
そして担任の教師となにやら話し込んでいて、教師は苦笑交じりに
笑みを浮かべて頷くと、女生徒は安堵したように微笑むと、その場

から立ち去ろうとしたが：唯、何となく気に掛ったので興味を覚えて声をかけた。

「ちょっと、いいですか？」

落ち着いた恐らく、ナイスミドルという単語がぴったりという感じの温和な男が笑みを浮かべて女生徒に声をかける。

女生徒は首を傾げて振り返り、彼の方に目を向ける。

「はい？…えっと、確か生活指導の…」

「ええ、そうです、谷相七瀬と申します。君は織部由美子：さん、でよろしいでしょうか？」

「ええ、そうですけど？何か用ですか？」

温和で落ち着きのある整った顔立ちの男性教師は、陵桜の女生徒たちにも隠れた人気があった。

彼女自身、彼の事にはあまり興味はなかったが、話には何度も上がるので名前も顔も覚えてしまった。

だから、何故呼びとめられたのか疑問だった。

「いえ、すみません：貴方が慌てているようなので、老婆心ながら興味を覚えてしまつて…」

「はっ、はあ：？」

自分自身に呆れるような笑みを浮かべて、まるでナンパ見たいだと七瀬は自身に失笑せざられない。

「先生：それ、口説いてます？」

「いえ。自分でも旨い聞き方はいのかと思っています。どうも、私はそれなりに不器用のようですから」

ちょっと、からかうように由美子はそう云うと、その表情のまま大

仰にため息を吐いた。

「ええ、ちょっと不良に絡まれた所を転校生に助けられてしまっ
て……」

転校生という単語を聞いた時、七瀬は眉をわずかに引きつらせて顎
をつまみ何故ながら云った。

「その転校生はそばかすで眼に隈のある……榊真夜という人物ではあ
りませんでしたか？」

「どうして知ってるんですか？」

「ええ、私と彼はかつて近所さんで世話になっていましたから……
彼が小学生卒業の時、違う学区の先生に私はなったので……それまで
に何度も親交もあり、今日ここで、彼と落ち合う予定というわけで
すよ」

「そうなんですか……実は……」

そう云うと由美子は安堵したように、それでいてややこわばった音
色で説明を始めた。

「おや、彼らしいですね……分かりました、それでは授業に行くとし
ましょ……丁度、というべきか、彼は私のクラス……織部さんたちの
クラスに決まりました」

「そっ、そうなんですか？」

出来すぎなくらいに決まったその配置に、織部はやや肩透かしを食
らった心情になったが、少し嬉しかった。

「では、行きましょ……か？彼の電話番号は私が知ってますので」

そう云うと彼は立ち上がり、教室へと向かって生き彼女のその後が続いていく。

そして、転校生、榊真夜の一日が今始まる。

一方、その頃。

「ねーねー…皆あ…」

こなたはHRルーム前の自由時間に皆の目の前で口を開いた。

そこにいるメンバーは、こなた、かがみ、つかさ、みゆき、みさお、あやの、そして慶一だ。

「何よ？また、ワケの分からないコト？」

どこかニヤつきながらいうこなたにかがみはため息交じりに返す。
そんなかがみを宥めつかさは曖昧な笑みを張り付けている。

「むっふっふっふー…隣のクラスに転校生が来るらしいよ？」

「いや、だから何？」

かがみのツツコミも最もでそもそも、他人のクラスの事情を話されてもどうリアクションしていいのかも分からないだろう。

「いやー…何か、この転校生ってミステリアスな気がしないっ？どこぞの学園の超能力者っぽいような」

「ハル〇ネタかよっ!？」

こなたのボケにかがみが突っ込むのが日常になっているのか、周りもそんなやり取りを苦笑交じりに見つめている。
すると不意に、つかさが口を開いた。

「でも……どうしてこなちゃんが隣のクラスの事を知ってるの？」
「やー……さっき、トイレの帰りに織部さんといーつと生活指導の谷相先生の話が聞こえてきたんだよねー……で、ちょっと立ち聞きしたのだよ」

「じ、自慢する事ではないような……」

その堂々とした口調にみゆきは何ともいえない笑みで冷汗を垂らし、て微笑んだ。

「で、何でも……からまれた織部さんをさっそうと助けたらしいよ？
ひょっとしたら、慶一君と同じくらい強い転校生かも」

その理由に慶一自身、そしてかがみたちは興味を覚えたのかすこしだけ聞き入ってしまった。

「ね？ちよっと興味が出てきたでしょ？」

「という事はいいい人そうね？その人……」

「うん……ちよっと会ってみたいってヴァ」

あやのはその転校生が力を慶一と同じように護る者に使う人物だと云う人に好印象を抱いた。

みさおも似たようなものだが属性がこなたに近いので早くもその人物に興味を覚えた。

「昼休み、見に行ってみようよ？慶一君も興味あるでしょ？」

「こう云う時、俺は格闘家だと思うよ……少し興味を覚えたな」

慶一はこなたに苦笑交じりに応える。基本穏やかで好青年ではある彼だが、人並みに好奇心が在りどこか強者を求めている。格闘家の本能に僅かに火がついたようだ。

「でも、あんまりそろそろ行くのは迷惑じゃないかな？隣のクラスのことなんだし」

「あー確かに……だったら、昼休みと放課後に分かれて行ってみましょう？それなら、迷惑じゃないでしょ」

「むっふっふ……かがみん、なんだかんだ興味心々だねえ……」

「うっさいな、興味持たせたのあんたでしょ？」

やいやい言いかけた二人をみゆきとあやのがなだめ、その光景をつかさとみさおは笑いながら見つめ慶一はそんな光景を見守っていた。

願わくば、こんな毎日が続かん事を……。

だが、それはその転校生によって打ち碎かれる事になる。

——その同時刻……。

「あー…つと職員室…つと」
ソバカスで眼に限のある…癖のある顔の少年が一年校舎で迷っていた。

カウントダウン（後書き）

次回はいよいよ邂逅…する予定です。
つまり未定です（をい

逢うと凄まじい展開になるので心構えをお願いします。

小さい子と大きい子に優しさを、逃げた者には悪意を。(前書き)

今回から慶一君は打ちのめされる描写が続きます。

彼が見てきて来なかった事を突き付ける真夜という立ち位置です。

小さい子と大きい子に優しさを、逃げた者には悪意を。

「ふうん…学校だけ見ると中々だね…」

誰もいない場所の一年校舎で、遅れて登校した真夜は興味なさげに呟いた。何故一年校舎に居るのか？単に道に迷っただけだ。

「授業を邪魔するのも悪いよね…でも、それ以前に皆待ち構えているんだろうか…な…？遅れてきた転校生…目立つのはそれほど好きじゃないんだけど…」

ぼそりと独りごとを小さく呟き、真夜は頭を軽く掻きながらため息を吐く。

（まあ、それでも森村が居る場所に…編入出来ただけでも良かったかな…）

タレ目を刃のように細めて冷然に冷たい笑みを向けながら、くすりと真夜は1人ごちた。

「ん？」

すると視界の端に赤と緑が端に入ってきてそっちに振り向く。

「ゆたか……大丈夫？立てる？」

「ん…うん…みなみちゃん…ちょっと休んだら立てるから…ごめん

ね…いつもいつも」

顔を青くしながら申し訳なさにゆたかは微笑む。

その笑みは無理して笑っているとみなみには通じていた。

しかし、ここで何と云う言葉を掛ければいいか、分からない。

大丈夫といっても、気にするなと云っても彼女の心の負担は軽くな
らないのは分かっていた。

「どーしたの？」

真夜は何とはなしに声をかけた。二人はその声の主に振り替えると、
その少年の姿を確認するとやや緊張した面持ちで見つめ返した。

タレ目なのに何処か鋭い、癖のある美系ではない顔なのにどこか整
っている、自分たちか同世代くらいなのに、どこか学生服という姿
に違和感が在るそんな少年は苦笑を向けながら自分たちを見つめて
いた。

彼の顔にある隈とそばかすが猶、それを際立たせていた。

「?どーしたの？」

「あっ…いえ…その…」

苦しんでいるゆたかは喋り返す元気はなく、それは自然とみなみが
返答する役割になっているが、この少年のどこか惹きつける空気に
呑まれてしまっていた。

しかし、真夜は一瞥した後、みなみの横を通り過ぎた後、ゆたかの
手を強引に掴みあげた。

「っ、ちょ…や…っ」

いきなりの事にゆたかは拒絶の音色を露わにして、遅れて数秒後、みなみははっとして目の前の不審な少年がゆたかを捉えようとしている事に焦り、警戒の眼差しを浮かべて少年の行動を遮ろうとしたが…。

「あー…僕道に迷っててさ…案内して欲しいんだけどー…頼める？と云っても、強引に案内させるんだけど…」

顔の作りを生かして悪魔的な笑みを浮かべ、真夜は二人にそうぼそつと言う。

「で、ないと……この子どうなっちゃうか分からないよお？」

「っ……」

ゆたかの手を背中に向けひねり、真夜は下卑た笑みを浮かべてみなみにいう。

人質に取られたゆたかは恐怖を張り付けた表情で、みなみを見つめた。

「っ…わかった……で、どこに案内すればいいですか……」

「そうだね……じゃあ、手始めに……」

緊張するみなみに下卑た笑みを浮かべて真夜は……こう云った。

「保健室に案内して」

その言葉にみなみとゆたかは拍子抜けした後、真夜は読めない愛嬌のある笑みをニコニコ浮かべているだけだった。

そして……

「あうう……」

ゆたかはその青年にお姫様だっこされて、廊下を歩いていた。
そばかすの少年はニコニコとしたままで歩いている。

「あの……」

「ん？ なぁに？ 岩崎さん？」

既に自己紹介を済ませたのか、真夜はみなみに笑みを浮かべたまま
そう答え返す。

「あっ…ありがとうございます…：ゆたかを運んでくれて…」

「何を言ってるのかな？ キミは？ 僕が保健室に様がいるだけさ……」

礼は云われる筋合いも義理もないと思うけど？」

困惑しながらも、自分の代わりにゆたかを運んでくれる青年にみな
みは礼を述べのだが、少年はその例をひねくれた言い回しで返して
いた。

「ふふ…面白い人ですね…？」

それがおかしいのかみなみはくすくす笑う。

「自覚はしてないけどね……」

「あっ…あの…私も有難うございます」

「だから、君は人質だっていつてるだろー？…そう云うのはナシ？

分かった？」

ゆたかも最初のうちは驚いたものの、自分を抱えあげる少年の顔を上から見上げて照れくさそうに微笑む。

その顔がどこかカッコよく見えて…その行動や動作が、ゆたかには…そしてみなみにも…在る人物を思わせたから…

「どこか…真夜さんは…あの人に似ています…」

「…ふうん…だったら、そいつはロクでもない人間なんだろうね…」

みなみのその言葉に真夜は自嘲気味に返す。その言葉にゆたかは少し怒った様に抱っこされてる態勢で睨んだ。

「そっ、そんなことありませんよ…真夜さんも『先輩』もとても優しい人ですよ、それを言ったら怒っちゃいますよお？」

「……ま、覚えておくよ……」

ゆたかは必死に真夜にそう訴えかけて、真夜は唯苦笑をこぼすだけだ。

そもそも、自分はそれほど出来た人間ではない。元々が在る人物の人生をめちゃくちゃに壊すだけにここに来た人物だ。

そしてもうそれは、決定事項で止まるつもりはない。

「……痛いなら、叫べばいい…」

「……え？」

「痛いのも苦しいのも、耐えるもんじゃないよ？…小早川さん？」

笑みを収めて真夜はじつと彼女を見つめた。その表情はさっきまで

違って、とても端正に見えたから思わずゆたかは見惚れてしまった。

「痛けりゃ、泣いても、叫んでも怒ってもいいんだよ？生きるってことはカッコイイ事や、華麗な事でもないからね……痛ければ、カッコ悪くても涙や鼻水やよだれを垂れ流してもいいから、叫んで叫んで、誰かを呼べばいいんだよ。そしたら、絶対、誰かが手を差し出してくれるから……」

「……真夜さん……」

「……………」

その言葉に二人は胸を撃たれたように動けなかった、

「でも、小早川さんはもう、そんな人を持っているから大丈夫だよね？」

そう云うと、みなみの方へ向いてにっこりとほほ笑んだ。みなみはちょっと驚いたけど、静かに小さくだけど強く頷く。

そんなみなみの姿が嬉しくて、ゆたかは照れくさそうに微笑んだ。

「へへ……っ、みなみちゃん……これからも……ずっと友達になってくれるかな」

「うん……ゆたか……これからもよろしく」

真夜を挟んで、ゆたかとみなみはお互いくすりと微笑みあった。

「じゃ、僕はこれで♪」

「ええ、小早川さんを保健室まで連れてくださって有難うございます、三年の校舎は分かりますか？」

「ええ…バッチリです」

彼女たちを保健室に届け出た真夜は保健室の扉付近で、天原ふゆきとみなみに見送られていた。

「また、逢いましょう」

みなみは小さく笑みを浮かべて、何処か楽しそうに笑みを彼女は浮かべるが、彼は疑問を浮かべた顔で悪戯っぽく笑った。

「んー…じゃ、また小早川さんを人質に取らないとねえ…」

「そうですね…そうすれば私も付いてくると思います」

そんな物騒で珍妙なやり取りをふゆきはやや冷汗を垂らして見守っていたが、彼女と彼なりの言葉遊びのようなので追及はあえてしなかった。

ゆたかは今ベッドで寝かされて穏やかな寝息を立てている。

「じゃ、縁が在ったらまた会おう。僕は三年の校舎にいるから」

「はい」

そういうと真夜は笑みを浮かべて、その場から歩き去って行った。

「何ていうか、不思議な感じのする人ですね？彼は？」

ふゆきは脳裏に友人が拾ってきた人物が頭によぎり、どこか共通する部分を探る様に小さくなる彼の背中を観察していた。

「はいっ：縁があればまた、逢ってみたいとは思ってます：」

みなみはそんな彼を見送った後、ふゆきに軽く頭を下げてその場を後にして教室へと戻る。

「しかし、何と云うか……不思議な顔つきの少年でしたね……」

善人にも悪人にも、見える独特な面構えの少年：気のせいかもしれないが、一度見たら忘れられない表情を持っていたと思う。

「ひかるちゃんと同じ、そばかすの子だからでしょうか……」

困ったように嘖き出すと、ふゆきは養護教諭としても業務に没頭することにした。

昼休み。

「ははっ、ベタだねー：織部さん：僕なんかと一緒にのクラスになるなんて」

「あら、私は楽しみにしていたのだけれど？」

若干、遅刻しながらも真夜は無事、転入クラスへと辿り着き無難な

自己紹介を済ませていた。

転校生はいつの時代も話題のネタなのか、何人かは興味深げに男女は彼に群がった。

どこから来た？趣味は？とありきたりのモノから好きな女性のタイプまで

だが、それも真夜は無難に返していた。

そして、なにより一同が注目したのは変わった髪型とその表情だ。ポニーテールを後頭部に巻き付けた女性的なヘアースタイル。そしてその特徴的な顔。

学年で人気の男子生徒は森村慶一と云う人物だが、その人物の顔は整っていた。顔つきは二枚目の部類に入るだろう。

だが、彼はそう云うのでは決していないのだが、見れば見るほど不思議な顔をしていた。味が在ると云うか、不細工ではないが見ていて飽きない端正さを持つ顔だった。

そして、その極めつけは軽やかな口調と立ち振る舞い、がいちいち輝いていた。

そして昼休みに至る。

「朝はありがとう…それで…そのあの、犬は…」

「ゴメン……もう…手遅れだった」

「……そう…」

朝に保護しようとした黒い犬が助からなかった事を、由美子は悲しい表情になったがすぐに笑みを浮かべてそう答えた。

「公園に墓を建てたから…見に行く？」

「あら、それはデートかしら？ 榊君」

「そんな甲斐性は僕にはないよ……」

悪戯をするように微笑む彼女に真夜は首を振りため息を吐いた。

「あら、つまんない」

「アハハッ、ゴメンゴメン♪……で、一つ訊きたいんだけど……」

「何かしら？」

「あそこで僕をじーっと見つめてる人たちは…君の知りあい？」

机に座っている真夜に興味深げに目線をぶつけてくる。

「B組の人たちね……泉さんに…日下部さんに、つかささん……それに森村くん……」

「っ……そう……」

森村と云う単語に真夜は眼を見開いて、自分を見る目線の方を改めて見つめる。探してる人物の名前は森村慶一……。と云う事は男だ……

女たちの中で男が一人…名前だけしか知らないと云う理由で静かに黙って様子を見る事にした。

真夜から見た彼の表情は一見、人のよさそうな顔をした好青年…と云う感じだろう。

湧き上がる黒い感情を無理やり押し込めて形式的な笑みを浮かべて、彼女たちを見つめた。

「おおッ…あの変わった髪型のそばすの彼が転校生ッ！！…むむう…何と云うか、ミステリアスな顔してるねえ…美系ってわけじ

やないのに、惹きつけられるうゝ…むー…デス〇ートのL…
あー…カ〇ジの主人公のような作りの顔かなあ…」

「あー…カイ〇は分かんないけど、それっぽいかもお…」

「おまえらな…」

慶一は二人に苦笑交じりのツツコミを受けて、とりあえず視線を由美子の横にいるその人物に目をむけた。

独特の髪型と顔付き…ある意味では忘れられないインパクトはある。その人物は気付いたのか、愛想に向けた笑みで手をひらひらと応じた。

「僕に何か用？」

「おおッ！エンカウント成立ッ！！」

真夜はそんなこなたの様子に面白そうな笑みを浮かべながらも、とりあえず手招きした。その内情には黒いものを燃やしながら。

「では、皆の衆、呼ばれてるので云ってみようか？」

「んー…気を使われる気がするんだけど」

「まあ、本人がいい見てーだし…いんじゃない？」

「あまり教室の外で睨むのも、確かに向こうにも悪いだろうしな」
四人はそれぞれのリアクションを放ちながら、ゆっくりと彼らのクラスに入り真夜へと向かって云った。

その目には興味があった。

「で、君たち？僕に何か用？」

「ズバリッ、謎の転校生は君かなあ？むっふっふっふ…」

「ん、一応そうなるかなあ？謎かどうかは分かんないけど、ねえ、織部さん？」

「まッ、そうじゃないかしら？唯のキモイ人だし」

「酷ッ…！！？」

由美子のあまりの物言いに真夜は眼を細めて突っ込んだ。といっても由美子なりの冗談で角度を変えてみるとかなり美系なのは何となくだが秘密にしておきたかった。

（…織部さん、ちょっと雰囲気変わったかなあ？）

慶一を脅迫した時のどこか高圧的な彼女の姿が、つかさたちの第一印象だったが今はそうではない。

いや、それは一折りの謝罪と和解の後でかなり変わったのだが…柔らかさが増したと云う感じがした。

「でっ、転校生くん？君の名前は？」

「そうだぜー、おしろよー…テンコーセー」

こなたの変なテンションに便乗して、みさおもそう尋ねる。真夜は困った様に微笑みながらとりあえず名前を名乗った。

「榊真夜、まあ、覚えておいてよ」

「んー覚えておくよ…キモイ人」

「こっ、こなちゃんっ…！ちょっとそれは酷いんじゃないかなあ」
「そか？」

三人のやり取りを苦笑しながら見守って慶一は真夜をとりあえず見てみた。その視線をあえて無視してとりあえず真夜はこなたに尋ねる。

「で、僕だけ名乗るのは不公平だよね？ 君らのお名前なんてーの？」
「むっふっふ…私の名前は泉こなただよっ、アキバのメシアと呼ばれてますが何か？」

「えっ…と…柊つかさです…」

「日下部みさおだぜえっ！ よろしくなっ、榊っ！！」

それぞれの個性に会った自己紹介をして三人は真夜に向かい笑みを浮かべる。その笑みを受けた後、慶一は真夜に向かい自己紹介をする事にした。

「俺の名前は森村慶一…これから、よろし…」

「ああーっ、訊いた事が在るよ。よしみず吉水中学…キツチューの修羅…あの森村慶一くん？」

元々、森村の顔以外は知っていたのでわざとらしく若干、驚いたように声をあげて（周りには内心を悟らせないように）驚いた。

慶一はその『キツチューの修羅』と云う単語に呆然とし、立ちつくした。

それはあの苦い記憶だ。自分が龍神家の子ではない事の憤りをあらゆるモノにぶつけてきた。

売られたケンカは回避することなく、叩きのめした。命乞いをしても動かなくなっても、拳と相手を血に染めながら叩き潰した日々。

自分を恐怖と憎悪の目で見つめる彼ら……。その視線が突き刺さる旅に自分がどこに居ても許されない様な気がして…尚も拳で訴えかけた日々…。

悪循環を繰り返し、親友の格闘家生命を断つまで止まることなかった。

た、嫌止まろうともしなかったあの日の自分…。

いくらその友、瞬一が許そうともこれはずっと残り続ける罪として彼は受け止めようとした。

そんな重い思考の海に埋没しかけたところを真夜はわざと小首を傾げて、こなたたちに訊いた。

「えーっと、どうしたのかな？ 彼は？」

「あ…っと…その…」

こなたたちは慶一の過去を知っており、そう云う荒れた時代もありそれを何より後悔しているのを知っていた。それがどれほどつらい事も。

同じ中学の由美子も当時、慶一とは接点はなかったが彼が暴れまわり物騒な連中が校舎に侵入しかけたのも何回か目撃している。

「いやあ…しっかし…僕の学区でもかなり有名だったよ？ 何でも、ヤクザとつながった末端の暴走族を潰して逃亡したとか？ 売られたケンカを買って、その人物を一生ベッドから出られない身体にして、トンズラしたとか…。」

真夜はつき付けるように、大声とは言わないが教室にいる人間に聞こえる程度の大きさでそう言葉をつなげる。

真夜のクラスの連中はその声を聞いて、若干引いた感じで慶一を見つめる。

「ちよっ…：…櫛くんっ！..！」

由美子はそれを聞いて焦った様に彼の口を止めようとした。

「なっ、何の事だよ？ 一体っ…何を」

慶一は真夜の云った言葉に心臓を貫かれるような衝撃を覚えて呆然と聞き返した。

ベッドから出れない？

「あー…植物状態だっけ？ ……まあ、残酷だけど自業自得…ってどうしたの？ キッチュの修羅さん？」

「なっ……あ……？」

息が出来ない。動悸が激しい、嘔吐感が襲う…。ガタガタと身体を寒いものが突きは知る。

真夜は愛想笑いのように見えて、冷酷な笑みを向けながら慶一に問う。

「ちよっ…柿君っ！！ いい加減にしてよっ！！」

「そっ、そーだよっ！！ けいちゃんがそんなこと…」

「したんだよ？ 知らないの？ こっちの学区にも、届いていたけどね！…どうして本人が知らないのかな？」

真夜は表面上は笑みを浮かべるだけで、内心はこう思っている。

ズレた事を、と思った。

彼がやってきた事はそれだけの事だろうに……。龍神流は本来は殺人手段なのだ。

例えるなら、意図的に自動車で街中に突っ込み相手を何人も引き殺すようなものだ。

『むしろくしゃしてやった』とでも云うつもりだろうか？

「あー：それとも自覚がないのかな？だよねえ：だったら、こんなトコロでこのうと綺麗な女の子たちに囲まれて過ごしてるはずないモンねえ？」

どこか嘲弄するように、いや嘲弄した音色で真夜は慶一に尚もつき付ける。

「っ…あ…ぐっ…」

口元に手を当てて嘔吐感が込み上げて慌てて、慶一は男子便所へと駆け出した。

吐き気もあったが、彼から逃げたかったのだ：いや、過去から逃げたかったのだ。

残されたこなたとつかさとみさおは敵を見るような眼で真夜を見つめた。

「ちょっと、榊君っ！！なんでっあんなことを？」

「事実だよ？君らのその様子だと、あまり動じてないみたいだけど：あーやっぱりそう云う事は云っていたみたいだね？」

「そうだよっ！けいちゃんの後悔してるんだよっ！？そんな風に振舞って瞬ちゃんの足を壊してしまったから：」

つかさのその言葉を聞いて、真夜は呆れたような顔でそう云った。

「……ケンカ売った奴……どうしようもない奴にも親がいる……その親に君はそう云うの？反省してるから、許してください？こっちはこっちで友達の足を壊してしまったから、あなたの子どもの事はなかった事にしてください……とでも？」

その言葉を聞いて、こなたもつかさみさおも止まってしまった。

「そ、そんな事は云ってねーってヴァー!!」

「そう云う風にしか聞こえないよ？」

真夜は優しい笑顔で容赦なく、慶一がやってきた事を突いてきた。そもそも、真夜は壊された立場の人間だ、その相手が日々を謳歌しているのが気に食わない。

器が狭いとは自分でも思うが、間接的にはいえ『奪われて』いるのだ。自分と七瀬にとって大切な人間を。

「ま、今はそれは置いておくよ……でも、事実だよ？」

それきり黙ってしまった三人と真夜の空気に由美子はテンションを変えるように切り出す。

「とっ、とにかく……そろそろ昼休みは終わるわっ、皆っ戻った方がいいわよ？」

「そーそー……まあ、キッチューの修羅にもよろしく言うておいてヨ」
♪

白々しく聞こえる音色で真夜は笑った。

「君って最低だねっ!!」

こなたは彼を睨み吐き捨てるように云ったが、笑みを浮かべてこう返した。

「そーだね…けど、ね…：あいつに壊されたもの、やらかした事は身内ごとじや済まないんだよ…：それをなかった事にして過ぐす彼は…最高っていうつもり？」

僕からすれば…それが卑怯で最低で下劣な行為だと思うよ…：そしてそれを庇おうとする君たちもね」

笑みを収めて鋭い刃のようなタレ目を見つめて、三人は寒いものが走り、そしてその事に何も言い返せなかった。

「榊君…：…」

由美子はその横顔を見つめていた。彼の顔には何処か憎しみや怒りがあるように見えた。

それは森村慶一に対するもので間違いないだろう…：推測すると、恐らく慶一は彼から何かを奪っている。そしてそれは恐らく取り返しのつかないものではないか？と由美子は漠然と感じていた。

「はつきり言うよ、君たちは彼といたら、駄目になるよ？本当の意味で…」

「そッ、そんなこと勝手に決めないでよッ！！」

「けいちゃんはいっつも私たちを助けて励ましてくれたんだよっ、そんなことにならないよっ！」

「慶一はイイ奴だっ！！私たちはそれを知ってるんだっ、悪い事は云わせねーぞっ！？」

真夜は冷静に返した言葉に三人は白熱した。周りも何事かと見やる、

だが話の内容が聞こえた者もいるらしく三人と真夜のやり取りを興味深げに見つめるものもいた。

「だから、それを僕だけに言ってどうするの？ って最初から言うてるでしょ？」

呆れてもう言葉も出ないのか、あからさまに小馬鹿にしたように溜息を吐いた。それが三人とも癪に障ったが、時間も時間なので教室から出て行った。

「由美子さん……」

「何かしら？」

「僕は間違ってると思う？」

「……思わないわ……多分……私も彼の素行の悪さは知っていた一人だから」

どこか訪ねるように真夜は彼女に問うた。その言葉にふっと何処か儚げに天井に向けて微笑み「よかった」とだけつぶやいた。

そう真夜に振られて由美子は詰まってしまったが、思い返してみると確かに彼は昔はひどかったのを記憶している。

あの時の自分なら、彼に告白や脅迫などしなかっただろう。

それはそれで自分の中の黒歴史なので、やや気まずそうに押し戻した。

「……あの子たちはイイ子だけど……あれは、キッチュの修羅……森村慶一の何かにはどれだけ時間をかけてもなれないよ……いや、そ

れ以前に誰かの何かになる事なんであの女子たちには一生できないだろうね…アイツを庇いだてする限りは…」

どこか憂うように真夜はそう彼女たちに呟いた。

由美子は彼の口ぶりからするに、笑顔で隠しているが内心怒っているのはうすうす感づいていた。

恐らく、慶一は何かをして彼の逆鱗に触れることをしたのだろう。だが、あの人格者の好青年の森村慶一がいったい何をしたというのだろうか？

「やっぱり興味ある…？」

「……ごめんなさい…目の前であんな事を言われたらそれは…」

だよねえ、と真夜は自重気味の笑みをむけて、真剣な表情で彼女を見つめ返した。その顔が覚悟を決めて鋭くて、見惚れるくらいだった。

「…今はまだ言わない…唯、あいつに直接何かされたわけじゃない。あいつと…八坂という女と永森って奴があいつについていったせいで、巻き込まれたんだよ。

まあ、いずれは言うつもりだよ、それでも傍メーワクな原因作った大元は奴だし」

「……そう」

後半、道化のような笑みを剥けてにかつと真夜は笑った。その笑みに複雑なものを覚えて由美子は黙って彼の事を見つめていた。

（八坂さん、永森さん、森村くん…あなたはこの人の何を奪ったの

?)

今、旋律の和を乱す不協和音が奏でられる。

由美子にはその音はつきり聞こえた気がした。

小さい子と大きい子に優しさを、逃げた者には悪意を。（後書き）

かなり苦情が来そうな展開ですが、そもそも今までこういう奴がいなかったのが

不思議でした。

この主人公、ダークヒーローかアンチヒーローの類なので結果こうなります。

様々な現実慶一に突き付けていきます。

不協和音、これからよろしくお願いします。

作者連絡（という名のバカ懺悔） ついでに主人公設定。（前書き）

小説タイトル変えました；らき☆すた つけたただけですが…。

作者連絡（という名のバカ懺悔）ついでに主人公設定。

えーっと、さるめです。

この小説を投稿する時、感想の受付をユーザ指定ありのまましてきました；

感想を描こうとしてみてくださいた方々は申し訳ありません。

これだけではあれなので、悪役主人公、榊真夜のプロフィールを書いていきます。

名前…榊 真夜

年齢…17歳

誕生日…3月3日

趣味…洋裁、和裁、服飾作業、菓子作り（主にケーキ関係）

エステティシヤンの真似ごと、理容師並みの散髪技術を持つ。
そしてえいすとの組み手など。

家族構成；母（養母）父は引き取られる前に死亡していた。

身長…180センチ

体重…58キロ

外見設定

癖のある顔で目のくまとそばかすがトレードマーク。

美形ではなくハンサムでもない。

唯、人を引き付ける空気があり、割と凌桜では知られていくことになる。

その顔つきは見ようによってはかなり整って見え、意外と女子には

付き合うまでもないが親しげな雰囲気醸し出している。

どこか、ガリガリでキモイところがあるのでアンガー〇ズとか言われているがその後にカッコイイがつくのが、彼の魅力になっている。

過去と現状

例をあげれば、慶一が無理なら彼と付き合いたいという女子も何気に多い（駄目な人も結構いるが、極端に嫌われてはいない）

料理はつかさと互するくらいで、中学時代バレンタインの日に女子が彼にチョコレートを自分の代わりに作ってくれと頼むほど。

ある意味、中学でモテた男子はほとんど彼からチョコを貰ったようなものだろう。

事前に真夜にチョコをくれという男子が殺到したという伝説がある。

性格設定

基本的に人当たりは良く、多少ボソついた感じで喋るものの、普段は悪人ではない。

唯、過去に自分と七瀬を巻き込んだ慶一、やまと、こう、瞬一については敵愾心を嘲笑と共に露にしている。

学生生活は基本的には満喫はしているが、慶一の事でこなたたちに警戒をされている。

本人は冷たい言葉を放っているが、こなた達を別に嫌ってるわけではない。

しかし、庇いだてするのなら容赦はしないようだ。

自分のやってる事を悪や、外道だと認識しながらも慶一にあくまでも敵対していく。

とまあ、ある意味、ビジュアル以外厨二全開ですね；
美形にはしたくなかったんです；かと言って顔が悪いのではなく、
悪い顔：という感じで、想像してください。

得意科目；家庭科。数学。

苦手科目…道德（影主譲り）

成績はこだわっているわけではないが、学年で4位から20位の
間で主に15〜4位の間をうろついている。

これは七瀬との付き合いも影響しているので、みゆきのような智識
を得ることに喜びを覚えているのではなく、

素直に七瀬の授業を聞いて、復習した努力の結果（つまり、頭は
悪くはないが、天才肌の順位ではない）

これくらいですかね…。

こんな奴ですが、よろしくお願いします。

背負えるのか？（前書き）

実際問題、こういう事を言う奴がいるんじゃないか？
という感じで作ってみました。

背負えるのか？

「はぁ…はぁ…」

胃の中のものをすべて吐き終えて、慶一は男子便所の手洗い場で一息ついていた。その顔は蒼白で小刻みにカタカタと震えている。

「榊…真夜…あいつは一体…」

自分に笑みのまま氷の刃を心に突き付け、にやりと笑う彼に慶一はある種の怖気と嫌悪感を感じていた。

——売られたケンカを買って、その人物を一生ベツドから出られない身体にして、トンズラしたとか……あー…植物状態だっけ？……

そんな情報知らない、聞いていない。

少なくとも、そういう事は記憶にないはずだ、だが、そう思うたびに戒めのようにあの男の嘲笑するような顔がちらついた。

「それより、授業：行くか」

チャイムがそろそろ鳴りかけてるのを見て、慶一は重い足取りで教室へと戻っていく。

こんな心情になるのは彼の友人の牧村瞬一の足を潰してしまった時以来だろうか。

だが、彼はまだ知らない。培ってきた過去が、自分の背中を追いかけて自分の将来、これからを闇へといざなっていくのを。

そして放課後にうつる。HRを終えて、真夜はかばんの中に教科書を詰めて帰ろうとしたが、思い出したように女友達と会話をしている由美子に声をかける。

「おーりべさん♪」

「あらっ、何かしら？」

「僕とデートしない？」

その一言に由美子は真っ赤になり、その取り巻きの友達も顔を真っ赤にしてはやし立てた。

「なにっ？もう榊君と付き合ってるの！？」

「うっわー、イイなあ：アタシと変われーゆみこー」

「ちっ、違うわよっ！大体っ、今日初めてあったのにっ！？榊君、あなたもあなたよっ、誤解させるようなこと言わないでくれるかし

ら」

「ハッハッハッ、ゴメンゴメン：ほら、朝言ったでしょ？ 甲斐性のないデートの話」

その言葉に、犬の墓を造ったという話を思い出した。少しだけ、悲しい顔で微笑み：

「そう、ね…お付き合いさせてもらうわ…」

当人の内情はともかく、女子二人はエンジンを組んでこそこそ盛り上がったいた。

「どうみます？ 新井さん？」

「そうですね…榊真夜くんはかなりのやり手で由美子は純情で実は騙されていると考えられますが…：あなたはどうみますか？ 石田さん？」

「二人とも何を言ってるのよ？ さて、と…じゃあ、行きましようか？」

由美子は盛り上がる友人二人に呆れたように突っ込みを入れた後、身支度を整えて変える準備をしようとしたが…：

「ゴメン、誘っておいて何だけど…いきなり急用が入った見たい」
「？」

真夜はやや冷たい目線で扉に居る人物に愛想笑いを浮かべた。そこにはこなたにつかさ、かがみにみゆき、みさおにあやのが敵を見るような眼で見つめていた。

それを察した織部は、苦笑でこう答えた。

「構わないわ：靴箱のところで待ってるわね？」

「ゴメンネ？」

真夜に笑みを浮かべてそういうと、由美子はそのまま教室の外へ出て行った。

その時に必然的にこなたたちにすれ違う。

「じゃあ、皆、さよなら、お疲れ様」

社交辞令程度に由美子はこなたたちにそう言って、その場を後にした。こなたは複雑な笑みを剥けながらそう云い返した後、再び敵を見るような真夜に目を向けた。

「新井さんと石田さんももう、帰った方がいいよ？戸締りは僕がしとくから」

「え、ええ……」

「わ、わか…ったわ」

どうもこなたたちの空気が悪過ぎて何処か真夜を心配そうに見つめた、だが、真夜は「平気平気」とだけ返し早く帰るように促した。

とりあえず、由美子に習うように二人も「さよなら」と笑みを浮かべてその場を立ち去るのが精いっぱいだった。

「これは、これはB組の泉さんに柊さんに、日下部さん……だったかな？ギャラリーが増えてるけど…何かようかな？」

まだ面識がないかがみ、あやの、みゆきを見つめて肩をすくめてそう尋ねる。言いたいことは分かるが、かと言って自分にはどうでも

いいことだ。

「こなたから、聞いたわ…榊真夜くんだったわね…私の名前は柊かがみ…そこにいるつかさの姉よ」

「私は峰岸あやのっていうの」

「私は高良みゆきと申します」

三人は堅い音色で自己紹介をして、厳しい音色で真夜をにらみ詰め寄った。だが、その三人の視線をそよ風の如く受け流した。

「ふうん…で、僕に何のようなのかな？言わなくても大体分かるケド？」

「慶一君の事…悪く言わないでもらえる？確かに彼はそんな事もあったわよ？けど、彼は今、後悔しててあの時の事を悔やんでいて…」

「……………」

かがみの睨みながら強く言う言葉に、わずかに真夜は目を細めた。

「榊さん、確かに慶一さんはそういう事をしましたけど、今は私たちにとってかけがえのない人なんです…余りそのような事は」

「慶ちゃんは、過去の事を後悔して暴れる事もやめて真面目に生きるようになったのよ」

あやののその言葉を聞いて、めんどくさそうにため息交じりに真夜は溜息を吐いた。それはそこにいる全員の神経を逆なでしたが、真夜は意に介さずにこう尋ねる。

「過去の事を後悔って…言ったよネ？あんなだけバカみたいに暴れていて、今更後悔するなんて都合よすぎない？」

「ッ…！！」

その言葉にかがみはためらいや躊躇なく彼の頬をはたこうとしたが、後ろから誰かに腕を掴まれて止められる。

「暴力ですか？ 柊さん？」

「ッ……！！ 谷相先生ッ……！！」

後ろに気配なく表れた若づくりの渋い教師の存在にかがみたちは驚きながら困惑していた。真夜はその人物を見て苦笑を浮かべると七瀬も苦笑を浮かべ返す。

「話は聞いていましたよ？ …いくら女子とは言えども大勢で男子を甚振るのは感心しませんよ？」

「ッ、だって、コイ……榊君がッ……！！」

激昂するかがみに困ったように肩をすくめて真夜は七瀬に向かいうなずくと、七瀬はかがみの手を離れた。

「森村慶一の事ですか？ 教師の言葉ではありませんが……吉水中学の凶暴な問題児だと私は記憶していますが……」

その言葉にこなたたちは信じられないような眼で七瀬の顔を見つめた。教師が生徒を凶暴な問題児とレッテルを淡々と張っているのだ。

端正なその顔の瞳は氷のように冷たく感じた。

「で、あのさ……」

そんな七瀬から注意をそらすように、真夜はこなたたちに疑問を投げかける。本当に面倒だというような表情で、だ。

「そもそも、何をどう後悔してるの？その慶一クンとやはは？誰か植物状態にでもして、その親とか家族や親族に恨み事でも言われたの？…の割にはその事実を言ったときはキョドってたから、それはないよね…？」

七瀬からある程度聞いてるが、青春を謳歌しており大人数の女子と集団でデートをしているという大雑把な表現だった。

少なくとも、省り見たことなど一度もないと真夜も七瀬も判断した。

「話たげるわよッ！！慶一君がどんだけ苦しんだのかッ！？」
かがみはあくまでふてぶてしい彼に態度に怒りながら叫ぶ。

内容はこうだ。

小学校6年の後半に今の両親と血のつながらない事を知り、その現実を受け入れる事が出来ず荒れ始め、感情のぶつけどころが分からずに日々を荒れて過ごす。

その気性が様々な不良グループを呼び寄せてしまう。親友である牧村瞬一という人物はそんな不安定な彼を一人にしておけず、彼と一緒に行動を共にする事になる。

だが、ある時…その瞬一を人質に取られ彼の足は武道家としての再起不能のダメージを負ってしまい、その時から慶一は贖罪の意味も込めて森村として生きることを約束する。

だが、真夜は肩を震わせて…笑った。

「あっはっはっはッ！？何それ、ギャグ？超ウケるんですけどーッ

「！！え？なに？それ？美味しいの？」

「ツツ：！！あんたって本当に最て：」

かがみは最低と言おうとしたが、真夜は冷たい目のままで笑みを浮かべた。

その顔を見て一同は降ろ恐ろしいものを見るように戦慄した：癖のある顔が悪魔のように見えたから：・

「結局のトコロ、それ：巻き込まれた奴に関して何の配慮もないじゃない？そもそも、その瞬一だっけ？そいつも大概、クズだね：友達なら、それこそボコボコにされても、ボコボコにしても止めるべきなんじゃないの？つーかさ：その間、親は何してたの？子供が道踏み外してるんだヨ？君らの言ってる事は、最低最悪の主張だよ」

その言葉に一同は絶句して言葉を放てなかった。

「事情はあったんだろうけど：ま、ホントの息子じゃないから、親もどうしてもよかったし放っておいたんじゃない？友達も、適当な言葉で付き添っていれば『俺、優しい』とでも思ってたんだろーね：そんな自分とまったく関係のないクズの一本の足と被害に会ったその人たちの人生とつりあうとでも？」

辛辣で冷徹な言葉を吐き捨てながら真夜は唯そう言い、髪を描き上げた。

その言葉に怒りを覚えるが、自分のなかのもう一つの感情の考えが言葉を放つ事を封じていた。

みゆきは困惑と怒りをないまぜにした表情で、緊張した音色で聞いた。

彼の口調はまるで：

「あなたは慶一さんに：『巻き込まれた人』なのですか：」

「ああ、そーだよ？まあ、僕にとっては大事な人だけと：あいつと八坂だったけ？後：永森ってのもそうか、そいつらのおかげで死んだんだよ？」

その言葉に全員、眼を見開き絶句した。

「ちょ：それっ、どう云う事さっ！？」

こなたはその言葉に驚きを隠せずに、それ以上に信じたくないような音色で真夜に詰め寄る。

「言葉の通りだよ？信じたくないならそれもイーさ：ケド、これだけは云っとくよ？」

真夜はいきなりこなたの懷をつかみあげ、つるしあげた。

小柄な少女を細身の少年は軽々と持ち上げる。

懷を掴まれ、呼吸が苦しくなりこなたは顔をしかめる。

「ウザイんだよ：：あんた等：僕はね、あいつにそれを突き付けるためにここに来たのさ：『部外者』が邪魔しないでくれます？」

凶暴化かつ嘲りを込めた表情で真夜はこなたを持ち上げたまま、かがみたちに冷たい視線を向けた。

その言葉に憤りを感じつつも、彼の威圧に物怖じして口を開けない。

「フン…じゃあね♪」

そのままぱっと持ち上げていた手を離した。

「あうっ!？」

無様に尻から落ちたこなたは痛みに顔をしかめながらも、きつと彼を睨んだ。

「……僕に体術を教えてくれた先生の言葉…教えてあげようか？」

冷たい笑みを浮かべたまま、真夜は彼女たちに言葉を続ける。

「龍神流は殺人術、光の世界では決して生き残れないし生きてはいけない…。使う時は…手加減はするな、手加減する位なら使うな…半端に振るった結果がアレだし、あの流派はそれだけの業が在る…リア充かつ恋愛脳筋なめでたい思考回路でやってけるもんじゃないんだよ」

眼を見開きあからさまに見下した音色を真夜は放つ、そんな真夜に激昂するようにこなたたちは口を開いた。

真夜はうんざりしたように肩をすくめてため息を吐く。

「だったら、試してみる？」

思いついた様な笑みで真夜は嗤う。目線で七瀬を見つめると七瀬は静かに苦笑交じりに頷き、制服の懷から一枚の名刺を取り出した。

「みなさん、これを渡しておきましょう」

「先生…これは何ですか？」

代表してかがみがそれを受け取り、真夜への憤りをひとまず沈下させ極めて冷静にそれを受け取った。名刺くらいの髪に七瀬の筆跡だろうか、住所が書かれている。

「これは…?」

「先程、榊君が云っていた…植物人間とかした人物の家族が住んでいる住所です…」

その言葉を聞いて一同は息をのんで七瀬を見やった。七瀬はこころなしに表情を殺して淡々と言い放つ。

「あなたたちは先程、榊君の話を聞いたはずですよ…だったら、あなたたちはその場所に行く必要がある。その目で見て来なさい…彼がどれだけの事をしてきたのか…」

「や、谷相…先生…」

穏やかで人当たりのいい生徒指導の教諭がどこか淡々と静かに、氷の様な双眸でその言葉を放つ。

その姿に違和感を覚えた一同は恐る恐る窺うように谷相を見つめた。

「……何か云いたそうですね……」

その言葉にやや憤りをこらえた音色でかがみは尋ねようとした、何故、あんな奴の肩を持つような言動をしているのか？

なぜ、慶一をかばってくれないのか？自分たちが間違ってる様に決めつけるのか…そう聞こうとした…。だがその前に七瀬は口を開く。

「…私は彼の行動のおかげで、娘を失いました……」

その瞬間、一同は固まったように動けない。

「実行犯は彼ではありませんが……八坂、永森、森村……それにそのご友人と良心の『おかげ』で娘は帰らぬ人となりました」

淡々とあくまでも七瀬はそう返す。その言葉にここに至って彼女たちはその現状がとてつもなく背負えぬくらい重いものと知って、カタカタと身体が震えだす。

「……貴方達の進路相談に立ち会いました、大学も出来れば一緒に……と云う事でしたね？」

「はっ……はい……」

「……私も榊君も、彼をどう法律に訴えるか模索しています……ので、諦めてください」

「っ……!! そんなっ!!」

無慈悲とも言える七瀬の音色にみゆきは涙を浮かべて縋るように云ってしまいが、真夜は一笑に付す。

「そんな事より、ホラ……さっさと云ってきたら？ 最も、僕たちにとってはその植物人間の奴も大事な人間を奪った奴の仲間みたいなんだから……イイ気味程度なんだけどね、
だ・け・ど……君たちはオオモトの味方をするって云うんだ。だから……」

その場所にでも行って、あいつの分まで頭を下げてきたら？ 絶対許してくれないだろうけど…。

「あいつといると云う事はその責任も業も分け合うってことだよ？」
嘲笑や冷笑の表情を隠して真剣な表情で、挑むように彼はそう云った。その表情は真摯で誠実な貌をしていた。

真夜のその言葉は一同の心を深くえぐった。

背負えるのか？（後書き）

んー…真夜をもう少し嫌な奴に移そうと思ってみましたが、
アンチヒーローは難しいですね；
ここから段々、慶一どころかこなたたちの日常が壊れていくかもしれ
ません。

リベンジ・ワルツ

由美子は下駄箱の場所で彼が来るのを待っていた。

（榊君……）

こなたたちと険悪な雰囲気だったが、本人が促す様に云ってしまった手前どうしようもなかった。

確かに、自分は森村慶一を慕っていた。例えそれが強引な手段や卑劣な策を用いても。けど今はそう思わない、それは失恋をしたからと云うのもある。

だが、真夜が彼につき付けた現実を背負うだけの技量や強さが自分には徹底的に不足していたのだ。情けない事とは思うが、彼の罪を共に背負えるほど自分は強くない事を由美子は自覚していた。

「でも…泉さん達が背負えるモノでもない…わよね」

遠くから彼女達を見て由美子は彼女たちが、それぞれの差異はあれど彼を愛してる事を。

だが、結局自分と同じ、未成年で普通の責任とは無縁の一介の女子高生にすぎない。

こんな事を言おうものならそんなことない、と激昂しそうだがそも

そも責任は親族や家族や親が大半だ。つまり、どれだけ覚悟を決めようがそんな物は会ってないようなものなのだ。

「そ。よく分かってるね、織部さん♪」

軽快な音色で歌うように由美子の独りごとに真夜はかぶせて、待ち合わせ場所にたどりついた。

「独りごとに割り込まないですよ？びっくりするでしょ？」

「アハハ、ゴメンゴメン♪」

陽気な笑みだった。そう、由美子は初めて見たときと同じ、陽気な笑みを浮かべていた。

でも、違うモノのように見えた。

「……あなたは、笑ってくれないんだ」

「……」

どこか残念そうで察した表情で由美子は真夜にそう云うだけだった。何を云ってるのか察しがついて、真夜は逢えて笑みのまま黙る。

「んー…織部さん、じゃ公園いく？」

「……うん…」

その言葉を聞いてやや自嘲気味に内心1人ごちた。

やはり、こんなロクでもない理由でココに居る自分とは行きたくなかったのだろう、自分はひとりの男の人生を狂わせようとしている。悪魔だ。

「デートにしましょう？ エスコートしてくださいさる？」
「え？」

その言葉に真夜は呆気にとられて、彼女を見つめ返した。彼女はどこか照れくさそうに、背中後ろに指を絡めてこう云う。

「ホラ、行きましょう？」

優しい笑みを浮かべて由美子は彼の手を引いた。慶一の時とは違い、自然に手を差し出した。

「…織部さん…」

その様子に真夜は笑みを浮かべた。

「榊くん、その方が感じがいいわよ」

「覚えておくよ」

どこか儚げな微笑で真夜は由美子に微笑んだ。

あれから7年後…

黒い女性用のビジネススーツに身を包んだ凛々しいポニーテールの

女性が墓場で手を合わせている。

その墓の名前には柁司と刻まれていた。

「……つかさ……もう、あれから7年も経つんだね……」

「ふうん……彼女が死んでからもう、そんなになるんだね」

そばかすの不思議な顔つきの童顔の男が、中腰になり墓に手を合わせているかがみに気のないように肩をすくめて声を掛ける。

「……龍神……慶一……くん」

かがみはどこか絞り出すような声でその童顔の男に躊躇うよう振り返り、彼を見つめた。

「今日は、『榊 真夜』で構わないよ」

自分のかつての名を真夜はどうする風でもなく、空を見つめてぼやいた。

慶一と名を変えた真夜はどうにも興味なさげだ。

「そんな人はいない……そう居ないの……」

どこか悲しげにかがみは真夜を見つめた。が、無感動に真夜は無表

情のままだった。

「牧村瞬一が殺されてから、数日後だったね、薄々予想していたけど……だけど……」

「分かってるわ……つかさを殺した人を恨むのは筋違いだって……つ、私達が彼の味方をしたんだからっ……!! 分かってるわよっ……!!」

思い出して涙を浮かべてどこか悲痛にかがみは叫ぶ。

「君はもう弁護士だ。僕やアイツと関わってつかささんが死んで……もう、わかったでしょ？」

あなたはもう選んだんだ。あの男に対する愛情よりも、法の方にね」

真夜は同情はしない、そもそも選んだのは彼女自身だ。巻き込ませるつもりはなかったが、関わってきたのだから止めようもないし、彼女に気を使う余裕などなかった。

七年前————

真夜の存在は二年生や一年のヒヨリ、パティ、いずみにも届いた。全員、真夜に対しては慶一を脅かす脅威として警戒していたが、ゆたかやみなみは困惑している。保健室に運び自分たちに親しくしてくれた人が、そんな人だとは信じられないのだ。

休み時間になった時に、ゆたかとみなみはそれが信じられなくて3年の校舎に駆け出す様に向かったのだ。

そこで二人は彼に問いかけるように矢継ぎ早に質問をした。

「榊さん……」

「んっ、あーきみは岩崎さん、小早川さんだったかな？何か用？」

若干息を弾ませながら、みなみは真夜は困ったような笑みを浮かべた。

「そのっ、榊先輩は…森村先輩を……」

「うん…ぶちのめしに來たよ？精神的に？」

困惑しながらゆたかは真夜にたずねるが彼は躊躇なく、禍々しくさわやかに云い放った。

「そんなっ…どうして…」

みなみは躊躇うように真夜に尋ねるが、真夜は冷たい笑みのまま僅かに黙った後…

「僕は…そのためだけにここに來た。だからじゃない？」

「そんなっ！！そんなのって…いけない事っ」

「あいつは僕の恋人を殺す原因を作った奴だ」

ゆたかの悲痛な発言を遮り、真夜は静かにしかし二人にはっきり聞こえる音色で押しつけるように云った。その言葉に二人とも、身体が金縛りにあったかのように動けない。

「…小早川、岩崎…」

冷徹な双眸で真夜は二人に訊く。二人はその表情が怖くて二人は怯

んでしまう。

「僕にあいつを許せ？それはこう云う事かな？僕の好きな人はあいつに殺されるためだけに生きてたって事を認めろってコト？へー…大人しそうな顔して二人ともグスイ事を僕に頼むんだねえ…」

「ち…ちがつ…」

彼の放つ冷たいものがはしるがみなみはそれだけを何とか云った。

「直接手を下していないなら、災難…とでも片づける…ふーん…よく分かったよ…小早川に岩崎だっけ…」

耳ほじりながら、軽蔑の音色をたたえたまま真夜は興味なさげでいて、目の前の二人を言葉で殺すつもりでこう云った。

「ウザいよ…お前ら…」

眼を細めてそう踵を返した。云われた二人は一瞬だけ身震いすると、目から滂沱の涙を垂れ流して三年の校舎で泣きじゃくった。

興味深げに周りに人だかりができる…みなみは泣きながらもみなみの手を引いて、ゆるい足取りで去って云った。

放課後に時間は流れる

「ゆーちゃんやみなみちゃんに何したのさ？」

こなたが開口一番、睨みながら真夜に詰め寄る、もう面倒なので真夜は分かりやすく無視をしたかったが、ひとり二人ならまだしも取

り巻きも結構いるのでそれも出来ない。

「嫌いな相手に付きまとわなくてくれる？もう18歳でしょ？人付き合いのやり方くらい覚えなよ？」

「あんたが、岩崎さんと小早川さんを泣かせてなかったらあんたの顔なんか見たくないわよ」

かがみは軽蔑と嫌悪感を吐き捨ててそう云うが、真夜はどこ吹く風だ。

「ハイハイ、僕が悪うございました…これで良い？」

あくまで馬鹿にしたような口調、いや興味がない口調で真夜はそう云った。

「オマエ、最悪だってヴァっ!!」

思わずみさおは彼の懷をつかみあげて、八重歯を剥き出しに睨む。みさおほどのリアクションは取ってなくても、三年メンバーの反応は似たようなもんだろう。

「そんな事よりさー…キミたちは森村慶一の代わりに謝ってきたの？昨日、住所を教えたよネ？」

「はっ、話を逸らさないでよっ!!」

こなたたちは一瞬の沈黙の後、かがみはそれがどうしたっ、と云う風に返した。その言葉に真夜は軽蔑の笑みを浮かべ、みさおの手を握り強引に引き離れた。

「っ!!!!」

「へえ…何ていうか、都合のいい考え方してるよねー？謝れ？ふうん…だったら、その前に僕の目の前であいつが全裸で土下座するのが筋なんじゃない？一例として？」

その言葉にこなたたちは怒りを緬い交ぜにして詰める。

「そもそも、諸悪の根源がだらだら女とつかえひつかえ楽しんで生きてるのに…なんで僕だけが謝るのさ？」

その言葉に三年勢の表情は険しい顔つきになったが、真夜にとっては本当にどうでもいいのだ。

むしろ、彼がこんな態度を取っているのは、『敵の味方』をしているからだ。

敵の対象が森村慶一なのに、それに謝るだの都是無理な話でそれに味方するこなたと旨くやっていくことなど出来ないし、するつもりもない。

（こう見えても、最大限に譲歩して丁寧に対応してるつもりなんだけど…）

真夜としては無関係者とはあまりもめたくはない。そもそも、慶一と関わらなければそれなりに応対するつもりだった。

だが、これでは真夜は絶望的だと感じている。ならせめて放ってほしいと思う。

「じゃ、忠告」

「なっ、なによ…」

「昨日、行かなかった事については別に何も云わないよ…僕はね…」

真夜はどこか死んだような眼で…光を映さぬ眼で————その目

は絶望を味わってきたものの独特の臭いがあつた——こなたたちを睨んだ。

その表情があまりにも引きつけられるほど、綺麗で怖かった。

「ケド：そのハンパさと甘さ：いつか、キミたち自身を不幸のどん底にたたき落とすよ？だから、今のうちに彼から離れた方がいい：昨日、その場所に行けなかった時点で君たちはもうあいつには絶対ついていけない：」

口調を和らげて真夜はそう云う。

「そつ、そんなことないもんっ！！私達と慶一君はずっと一緒に居るんだよっ！これから大学に云って皆……」

「……僕から見たソイツは：少なくとも、口ではそう云っても実際のところ、別にそれは君たちでなくてもいいと思ってるけどね」

「あつ、あんたなんかひと目しか見てないっ、あんたに慶一君の何が……！」

「少なくとも、この中にあいつが惚れてる女がいるとは思えないね」
かがみの言葉を遮り、真夜はいっぺんの慈悲もなしにそう云うとこなたたちは眼を見開いて絶句した。

「まあ。ぱつと見だから、偏見が多分に入るんだけど：君たち森村慶一って人間を勘違いしてない？」

拒絶と嫌悪を押し込めた声色で真夜は云いきると「失礼」とだけ返して席に立ちあがる。

「ちょ、待ちなさいよっ！」

「ん？トイレまでついてくる気？チャレンジャーだね」

かがみの制止を挑発的にそう返す、かがみはその言葉に真っ赤になりながらも彼を睨んだ。

真夜は彼女たちとは絶対相容れない事は分かっている。だが、彼女たちは彼を嫌悪しながらも分かっている。はいない。

そもそも、いくら好意を寄せた人物を悪く云われたと云い食ってかかって、真夜には無意味だ。

（さて…と…森村が居ないと云う事は…あー…逃げたね…）

内心冷たい笑みを浮かべて、真夜はそう考えた。そうだ、あいつは自分が何をしたのか、その結果を何一つ自覚せずに、生きてきた。都合の悪い事は考えもしなかった。それが真夜が想像し推理する森村慶一と云う男だ。

「さて…追いかけますか…」

陰鬱な笑みをうかべて真夜はゆっくりと歩いていく。

旋律のリズムを乱す不協和音がゆっくりと中心となる指揮者に向かって云った。

それは韻のないワルツのようだった。

リベンジ・ワルツ（後書き）

ここから割ときつい展開になるかもしれませんが、
初っ端から；
では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0398m/>

らき☆すた 変わる日常 不協和音

2010年10月30日18時45分発行